はしがき

本論文集は 2005 年 3 月 5 日の東京大学におけるシンポジウム「19 世紀ロシア文学という現在」の報告者 9 人の論文を集めたものです。同シンポジウムは安達大輔（東京大学大学院）・越野剛（SRC）・毛利公美（SRC）の企画により、19 世紀ロシア文化研究会（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slav/19vek.html 代表：安達）が主催し、北海道大学スラブ研究センターの 21 世紀 COE プログラム『スラブ・ユーラシア学の構築』（代表：家田修）の協力を得て開催されました。

本論文集ではシンポジウムで報告の順番に従って論文を掲載しています。冒頭のセッション「作家という症状」で報告された久野論文は、精神医チシの書いた病跡学の書物を通じて 19 世紀後半の精神医学と文学の関係を分析しています。第 2 セッション「文学のテクスト／宗教の言説」では、小林論文がドストエフスキーの日本での受容という局面で浮かび上がってくる日本人の宗教意識について、望月論文は『カラマーゾフの兄弟』およびその他の 19 世紀ロシア文学のテクストに現われるイエズス会士のイメージについて論じています。第 3 セッション「視線の政治学」の鳥山論文はヨーロッパの芸術評論で重要な意味を担っていたピクチャレスクという概念を手がかりにして 19 世紀前半のロシア文学を概観するものです。第 4 セッション「自己の表象」では、山路論文がレールモントフ『現代の英雄』における歴史的な事件と作中の出来事の日付の奇妙な一致について考察し、大川論文はトルストイとゴーリキーの「擬似自伝文学」において自他の関係性を規定する「他者のまなざし」について分析しています。第 5 セッション「文化的他者への作法」ではロシアから見たアジア／ヨーロッパから見たロシアという互いに交差し合う問題が取り上げられました。乗松論文はベストゥージェフ＝マルリンスキーのカフカスを描いたテクストと「リアリズム文学」との関係を考察し、坂庭論文はチュッチェフの政治論文におけるロシア像と抒情詩におけるヒロイン像が「不可解さ」を媒介にして自律的な他者性を獲得していることを明らかにしています。第 6 セッション「テクスト性の系譜学」で報告された番場論文はテクストの彼方に聴き取られる人間の「声」によって 19 世紀文学の射程を測ろうとしています。

古典として評価の定まった感のある 19 世紀ロシア文学の世界の中に「現在」という視点から新しい眺望を見出そうという野心的な企画であり、若手研究者中心の運営ではありましたが、全国からたくさんの方々に来場いただき、時間を大幅に超過する熱心な議論の時間を持つことができました。本論文集の発行をきっかけに、読者の皆様から新たに忌憚のない御意見をいただければ幸いです。

北海道大学スラブ研究センター
越野剛（編集担当）gkoshino@slav.hokudai.ac.jp